

競艇場から生まれた

監査ファイル
1

事件——領収書の話——

1

「はじめまして。今日からこちらの現場でお世話になります、J1^[01]の柿本一麻と
います。よろしく願います！」

十月に監査法人に入所して二週間。これまで研修しかしてこなかったが、ついに
監査の現場に出ることになったのだ。

ここは万葉産業^{まんようさんぎょう}という繊維専門商社。その本社の一角にある会議室が、監査の現
場となっていた。

部屋のテーブルの上には、監査法人から持ってきたと思われる数十冊もの調書類

が散らばっている。その調書の山のむこう側に座っていた大柄な男性が、顔を上げ
て僕のほうを見た。

「君が今日からここに来る柿本くんなんやなあ。俺はJ3^{みぶ}の壬生^{みぶ}っていうねん。今
回は主査^[02]と俺と柿本くんの三人での監査やから、よろしくなあ」

壬生さんは柔らかな関西弁で僕を迎えてくれた。よかった、優しいそうな先輩で。

まあ、これでとりあえず、先輩への挨拶 という第一関門はクリアした。次なる
関門は 主査への挨拶 だ。「主査とは、絶対仲良くしておけ」と友人の先輩会計士
からも忠告を受けている。

「……あのう、この現場の主査はどなたなんですか」

「ああ、主査は入所四年目で今年から公認会計士の藤原萌実さんや。ほら、むこう
の部屋で偉そうなおじさんとしゃべっている人がおるやろう。あの人やで」

僕はガラスの壁で仕切られた会議室のむこう側を見た。どうやら、むこうは財務
部や経理部の部屋らしい。

その部屋の中で茶髪に真っ赤な皮ジャケット、黒の皮パンというひとときわ目立つ
た恰好をした若い女性が、偉そうなおじさんと話している。その会話はこちらから

01

J1とは、会計士補（Junior Accountant）1年目のこと。3年目だと「J3」と呼ばれる。会計士補とは、公認会計士2次試験合格から3次試験合格までの間の身分で、3次試験に合格すると晴れて公認会計士になれる。

主査とは、監査現場の責任者のこと。顧客企業ごとに一人の主査が付き、主査が数名のスタッフを従えて監査が行われる。

02

でも聞こえそつだ。僕は壁際へ行き、聞き耳をたてた。

「……やったー、坂上部長ったら。でも、モーターボートって面白そつよね。今度は私も競艇場に連れて行ってもらおうかしら」

「んっ、競艇場!？」

僕は思わず壬生さんに聞いた。

「もしかしてあの場違いな服装をした人が、ここの主査の藤原さんですか!？」

「ああ、そつやで」

「本当ですか!？ あの人、いま部長らしき人と競艇の話とかしていましたよ!？」

「へー、相変わらずやなあ、萌さんも。まあ、あれが萌さんのやり方やから、気にせんとき」

そのとき、話題の彼女が会議室に帰ってきた。彼女は僕を見つけると、僕のほうへとやってきた。

「あなたが今日からここの現場で働く柿本一麻くんね。私は会計士界のアイドル藤原萌実よ。呼ぶときは『萌さん』でいいから」

非常に軽い口調で僕に言った。

「萌さん、自分で『アイドル』とか言ったら世話ないで。そういえば、このまえば『会計界のプリンセス』とか言ってはりましたなあ」

壬生さんはやんわり萌さんに指摘した。

まあ、アイドルにするプリンセスにする、萌さんはそう呼ばれてもおかしくはないルックスはしている。確かに自分で言うのはどうかとは思つが……。

「ミプリンもつるさいわねえ。じゃあ、カッキー。私が仕事を教えるからあつちの席に座って準備してー!」

「あつ、はこ」

萌さんの勢いに僕は完全に押されてしまった。

「……壬生さんってミプリンと呼ばれているんですね。いやそんなことよりも、僕のことはいつの間に『カッキー』になったんですか?？」

僕がつぶやいた言葉も、きつと萌さんの耳には届かないのであるつ。

「まずカッキーには販管費^[03]のチェックをしてもらうわね」

「べつやら萌さんの中では『カッキー』が勝手に定着したらしい。」

「ほら、そこに領収書の束があるでしょう。帳簿の記録どおりにちゃんと領収書があるかどうかチェックしてほしいの」

萌さんが指したほうを見ると、ダンボール箱に書類の束が積まれていた。

「これが万葉産業の半年分の領収書よ。一応、日付順になっているはずだから簡単でしょ。カッキーには怪しいものがないかを調べてほしいの。明後日までにはチェックを済ませておいてね」

「あー、すいません。怪しいものって何ですか」

「簡単に言つと偽造よ、ギ・ソ・ウ。偽造っぽいものがあつたらすぐ言つたよ」

その言葉に僕は面食らった。

「偽造の発見が僕の仕事なんですか!?! そんなこと新人の僕にできるんですか」

「とにかく、やってほしいの。カッキーも現場に来たら一人前のプロなんだからね」

仕方がないから、ちゃんと本物と偽造の見分け方も教えてあげるわよ」

萌さんの言葉に僕はただなすくしかなかった。

「はっ、はい。よろしく願います」

「じゃあ、始めるわよ。まず帳簿と領収書を見比べて、相手先や科目・金額・日付とかが一致しているかどうかを確かめて。それらが異なっていたら怪しいってことだから。あと、ハンコがちゃんと押されているかどうかも確かめるのよ」

「はー」

「それじゃ、さっそくだけで、この領収書が本物かどうか確かめてみてくれる?」

萌さんは手元にあつた領収書を僕に手渡した。それは、ワープロで打ち出されたA4の紙に、赤く大きな社印が押された領収書だった。

「これですね。わかりました、がんばって調べてみます!」

僕は張り切つて領収書と総勘定元帳^[04]のファイルとを見比べた。

「ええっと、領収書も帳簿も 株式会社サキモリ電気 で 修理代 九万円 八

月七日 で一致しています。領収書にハンコもちゃんとある。萌さん、これは本物

総勘定元帳とは、企業のすべての取引記録（仕訳）が書かれた帳簿のことである。この元帳から財務諸表（貸借対照表や損益計算書など）が作られるため、会計上もっとも基礎となる帳簿である。

販管費とは「販売費および一般管理費」の略で、商品の販売部門や管理部門で使われた費用のことである。たとえば、販売促進費・賃借料・給料手当・旅費交通費・保険料・水道光熱費・消耗品費・交際費などがある。

の領収書です!」

僕は自信を持って答えた。

「ブツ、ブツ。大ハズレ。この領収書は真つ赤な偽物です。カッキー、まだ甘いわよ、あんたが私に勝つつなんて百年早いわね」

萌さんは勝ち誇ったように言った。

「ど、どつしてなんですか!? どう見ても本物に見えるじゃないですか。そもそも僕は別に萌さんと勝ち負けなんて競っていないんですけど……」

「いいの! 私は仕事と恋愛はいつも真剣勝負なんだから」

「まあ、恋愛のほうは知りませんけど……」

僕のつぶやきはまたもや萌さんの耳までには届いていない。

「ど、ど、悔しい? じゃあ、これはどつして偽物なのか教えてあげようか」

「……はい。教えてください」

「そ、れ、は、この領収書はさっき私が作ったからよ」

「ちょ、ちょっと会計士が偽造領収書なんて作っていいんですか!? だいたい、どつやって作ったんですか!」

「それは、簡単よ。帳簿のファイルに嘘の取引を書いたページをはさんでおいて、その嘘の取引に合わせた偽造領収書をワープロで打ち出しただけよ。カッキーは、手書きとワープロの領収書があったら、どっちに疑いを持つ?」

「それは、手書きのほうじゃないですか。手書きのほうが誰でも作れそうですし」
僕の答えに対し、萌さんは首を横に振った。

「それが甘いつていうの。ワープロのほうがちゃんとして見えるし筆跡もばれないから、偽造はしやすいのよ。だから、ワープロで作ったもののほうが偽造の可能性は高いの」

「なるほど。じゃあ、この赤い社印はどつやって作ったんですか」

「他の領収書の社印を転写しただけよ。ハンコの朱肉を油絵で使うテルペン油で溶かして、それにセロハンを当てて朱肉を写し、偽造領収書に押し当てるの。すると、ほら本物の社印のように見えるでしょ」

萌さんは実際に使った道具を取り出して説明した。

「萌さん、会計士なのに何でそんな偽造セットなんて持って来ているんですか!」
「偽造を見抜くためには、自分でも偽造くらいできなきゃダメよ。例えて言つたら、

泥棒を捕まえるためにはまず自分も泥棒にならなきゃ、ってね」

「……泥棒になるのは犯罪ですよ。でもまあ、おっしゃりたいことはわかりました。しかし、こういった偽造領収書の場合どうやって見破ればいいのですか」

「このケースの場合、まず社印の朱肉がやけに薄いことに気付かなきゃダメね。この方法で転写した場合、朱肉が薄い上に消しゴムに弱いからちよっと消しゴムで確かめてみるのもいいわね」

僕は 監査って奥深い と正直思った。

3

監査は二日目に入った。今日は萌さんが遅刻らしく、壬生さんと二人で監査をスタートした。

「あー、壬生さん。萌さんって、いつもあんな感じで監査しているんですか。自分で領収書を偽造する会計士なんて初めて聞きましたよ」

僕は領収書のチェックを続けながら、壬生さんに話しかけた。

「まあなあ、萌さんみたいな会計士は滅多におらへんやろつなあ。でも昨日は『新人が来るから』と言って、朝から張り切って領収書を偽造しておったんやで。もしかしたら、萌さん流の新人歓迎やったんちゃうのかなあ」

なるほど。もしかしたら、萌さんは僕に監査という仕事の厳しさを教えるために、わざとあんな手間がかかる事をしてくれたのかもしれない。

「それにしても、萌さんはおいくつなですか。まだ若そうに見えますけど」

「ああ、若いで。萌さんはまだ学生さんやもんなあ。史上最年少で合格して、学生のうちに三次試験に合格したんや」

すっ、すっい。学生時代から受験勉強をし続け二十九歳でようやく合格できた僕と比べると、萌さんはかなりすっい。

「じゃあ、萌さんが今日遅刻しているのも大学に通っているからなんですか」

「違つんとちゃつかな、たぶんいつもの理由やと思っけどなあ」

そのとき、会議室に萌さんが走り込んできた。今日はキラキラした黄色いワンピースを着ている。この人は一体何を考えているんだろっ。

「ごめん、ごめん、遅刻しちゃって。今日は電車が混んでいたのよ」

萌さんは笑顔でごまかしながら、席に着いた。

「あー、電車が混んだだけでは遅刻にならないと思うんですけど……」

「あつ、ホンマや。柿本くんの言うとおりや。萌さんの言うことになんともなく騙されるところやったで」

「カッキー、なかなかいいところに気が付いたわねえ。監査人としては合格よ。それで、領収書のチェックのほうは何か見つかった？」

萌さんは悪びれもせずと言った。まあ、きつといつもこんな感じなのだろう。

「いまのところ、怪しいものなんてありませんが……」

「ふん、そうなんだ。じゃあ、今度は月次比較もやっておいて」

「月次比較って、月ごとの金額を比較するんですか」

「そうよ。六カ月間の金額を並べて、異常に多かったり少なかったりする月があったら教えてね。何らかの不正工作がされている危険性があるから」

4

監査三日目。僕もだいぶ監査に慣れてきた。

「あー、坂上部長。ちょっとお伺いしてよろしいですか」

「んっ、君は確か新人会計士の柿本くんだったかな。私に聞きたいことは一体なんだね」

僕は怪しい領収書が見つかったので、会社の人に直接聞いてみることにしたのだ。

萌さんは昨日と同じで遅刻だし、壬生さんも他の部署にヒアリングに行ってしまったので、僕一人でその領収書の取引を承認した経理部の坂上部長に話を聴きに行ったのだ。

僕が見つけた怪しい領収書とは広告宣伝のデザイン会社の領収書。

市販の領収書に手書きで金額が書かれており、その会社のハンコも押されている。セオリーでいけば、手書きの領収書のほうが怪しくない。そのうえ、この領収書の字は毎回、別の人の手によって書かれている。

しかし、月ごとの金額推移を見ていくと 一万円払っている月もあれば、二

万円ほどの月もある。増減が異様に激しいので怪しいと思ったのだ。

「　　とうわけなんですけど、どういった理由でこんなに増減が激しいんですか」
 「これは広告宣伝費だぞ。月によって宣伝の量が違うのは当たり前だろう。だから金額が違って当たり前だ！」

「あつ、えーっと、でも去年の広告宣伝費はほとんど毎月一定だったんですけど……。今年になってから増減が激しくなるなんておかしくないでしょうか」

「一体君は何が言いたいんだね。何かね、君は我々が不正でもしているとでも言いたいのか」

「いえ、そんなめっそうな……」

「では、さっきの説明で十分だろう。広告宣伝費とはそういうものなのだ。私も忙しいから、君も会議室のほうへ戻ってくれないか」

「……はー」

散々に怒られてしまった。経理のこともよくわからないのに会社の人に尋ねた僕が悪かったのだ。僕はしよげながら戻ろうとした、そのとき

「　　カッキー。別に戻らなくていいわよ」

「も、萌さん！　　どうしたのですか。いきなりやってきて」

僕のそばには純白のミンクのコートを身にまとった萌さんが立っていた。僕にはとても頼もしげに見えた（服装はぶざけていたが……）。

「藤原先生、その新人君をなんとかしてくれたまえ。言いがかりをつけてくるので、こっちも困るんだよ」

「坂上部長、柿本が言ったことは別に言いがかりじゃないわ」

「萌さん！」「藤原先生！」

僕と坂上部長は同時に叫んだ。

「カッキー、よくやったわね。あとは私がやるから安心しなさい」

5

「藤原先生、一体どういうことだね。わしに恥をかかせる気か!？」

「どうもこうもないわよ。だって、この領収書は偽造されているんだもん」

「な、なにを根拠に一体……」

坂上部長は焦りの表情を見せた。

「今年になって突然月ごとの増減が激しくなっているじゃない。それだけじゃないわよ、領収書の字が毎回違つてしょっ」

「藤原先生、領収書の字が毎回違つるのは逆に信憑性が高いんじゃないのかね」

「残念ながらそれは違つわ。市販の領収書を使う会社よ。当然、数人でやっているような小さな会社のはずよ。そういった会社の経理担当者は通常一人なんだから、毎回同じ筆跡のはずでしょう。それなのに毎回違つ人が領収書を書いているなんて不自然じゃない？」

「っ、っ」

「それに、坂上さん。だいがギャンブルで負けているらしいじゃない。競艇場で聞いたわよ。ギャンブル仲間たちが言うには、最近ではサラ金で首が回らなくなって苦しいとか」

「……藤原先生。ここでは何ですので、場所を変えて話しませんか……」

坂上部長は観念したかのようにうなだれた。

そのあと、坂上部長はすべてを白状した。

サラ金への返済のために会社のお金を使ったこと。それがばれないようにするために偽造領収書を作ったこと。実はデザイン会社そのものが架空の会社で、社印もこのために作らせたこと。領収書の手書きの部分は怪しまれないために毎回違つギャンブル仲間にかかせたこと（まあ、これが裏目に出たわけだが）。

結局、坂上部長は会社を懲戒免職になり警察に引き渡された。

僕は再び通常の監査へと戻った。

「萌さんが坂上部長と仲良く競艇の話なんかしていたのは、このことを突き止めるためだったんですね」

「まあね。こここの〇したちが坂上部長の行動が怪しいって噂をしていたから、ちょっと気になったのよ」

「じゃあ、毎朝遅刻していたのも競艇場で聞き込みをしていたからなんですわ」

「横領や着服を発見するために、怪しい人物については詳細調査をしなければならぬのよ」

プロの監査人とはこういうものなのか！ 僕ははつきり言って感動した。
 「萌さんのそのやけに目立つ場違いな恰好も、他人の目をこまかすためなんです
 ね！」

「えっ、これは私の趣味よ。なに、カッキーは私の恰好に文句でもあるわけ!？」
 「萌さんの目は本気で怒っていた。」

「い、いえ、……」
 「ごめんなさい」

監査日程表を見ると、僕は萌さんのチームで仕事をする人が多いようだ。これからの監査がなんだか楽しみになってきた。

ちなみに、競艇場から生まれたこの 横領事件 は、もうひとつ 事件 を生んだ。

それは、萌さんがこの事件をきっかけに一時競艇にはまり、競艇場にたびたび出没したのだ。某競艇場では、場違いな恰好をした萌さんが 競艇場のアイドル として話題になったそうだ。

まさかその女性が公認会計士で、その恰好は仕事場でもやはり場違いである、と

は誰も思っていないであろう。

競艇場から生まれた 事件 おわり

